京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を

株式会社　京都建築事務所
代表取締役社長　細見 建司

〒604-8083
京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地
TEL:075-211-7277
FAX:075-211-7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

障害者家族の老いを生きる支える

藤原里佐・田中智子・社会福祉法人 ゆたか福祉会 編著
A5判240頁　定価2420円(税込)

老いる権利、看取る権利の確立を目指して——
障害者・家族・職員600人の全数調査で見えてきた障害当事者と家族の高齢化の課題を分析・考察、求められる支援のあり方を問う。

発達障害児者の"働く"を支える

保護者・専門家による ライフ・キャリア支援

松為信雄 監修　宇野京子 編著
A5判224頁　定価2420円(税込)

ウェルビーイングな「生き方」? 生きづらさを抱える人たちが、よりよい人生を歩むための「働く」を考える。
「見通し」をもって、ライフキャリアを描けるように、保護者・専門家などの立場から事例や経験、生き方や想いを具体的に。

クリエイツかもがわ
CREATES KAMOGAWA
〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21　https://www.creates-k.co.jp
TEL 075(661)5741　FAX 075(693)6605　送料330円(5000円以上無料)

点字版『福祉のひろば』の発刊まで

月刊誌『福祉のひろば』は、毎月その点字版も発刊されています。現在の点字版読者さんは、北海道から沖縄までなんと40人！　点訳は、大阪市内にあるNPO法人点字民報社が担ってくださっています。点字版『福祉のひろば』は、2000年の月刊化直後のころから発刊されているとのこと。現在は、点字を読むのがしんどくなってきている読者のために、誌面を読み上げて録音した音声データも提供しているとのことです。

まず、毎号の『福祉のひろば』テキストデータを、自動点訳ソフトで点字データファイルに変換。それを点字民報社の職員さんが、誌面のPDFデータを参照しながら、点字データの誤変換を修正したり、点字版読者がより読みやすいように配置やレイアウト等の調整、点訳者注の付記をします。次は読み合わせです。点訳したデータを声に出しながら触読し（前頁写真）、職場介助者（晴眼者）がそれを聞きながらPDFデータを確認し（写真）、誤りをチェックします。ここまでの作業で、５日間を要します。

点訳データを点字プリントし、触読しながら校正したのち、製版です。点訳データを、点字製版機でプラスチック板に製版します（写真）。その後、再度製版した原板で声出し触読により校正作業をおこない、いよいよ印刷です。原板に用紙を挟んで機械で圧を加えると、原板の点字が紙に印字されます。それを検品・製本して、やっと点字版『福祉のひろば』の完成です。点字版『福祉のひろば』は240ページとなり、厚みは小さな辞書１冊分ほど。読み上げた音声データは、全部で４時間半ほどになるそうです。

本誌編集室にも点字民報社にもあたらしい職員が入職したこともあり、このたび、交流と研修の場をもちました。点字版作業のくわしいお話を聞いたのは、私もはじめてでした。点字は表音文字のため、「音」がとても大切です。たとえば、中島さんは「なかじま」なのか「なかしま」なのか、固有名詞はとくにむずかしいとのこと。同音異義語の扱いもむずかしく、本誌23年9月号の特集でとりあげた、「協同」「共同」「きょうどう」は、その使い分けを点字読者に説明するため、どの漢字が使われているか、点訳者の付記を挿入してくださっていました。この連載が好き、あの記事はよかったと感想や応援もいただき、「毎月発刊」というプレッシャーや苦労も共有しながら、とってもすてきな交流の場となりました。（写真・文　申　佳弥）

【ひろばトーク】
すべての人が子育てを楽しめる社会へ　辻　由起子　6

福祉のひろば

2023年11月号

●特集●　防衛費倍増では平和といのちは守れない
～第28回社会福祉研究交流集会in大阪～

【記念講演】浜矩子さん×望月衣塑子さん　藤原　民人　12
社会福祉の仕事の意味と役割を実践報告から考える　八木あゆみ　18
住民の暮らしを守る地域をどう再構築するか　中井貴美恵　20
コロナ禍が明らかにした福祉と医療の現実と課題　清水日出美　22
未来につなげよう！　こどもの権利　杉元　千尋　24
若手職員と学生のつぶやき　今﨑　佑介　26
【特別講座】ケアを大切にする社会へ（元橋利恵さん）　28
参加者の感想を少し一部します　32

●トピックス●

第28回合宿研究会inソウルのご案内
～低出産・高齢化・貧困　日韓共通の課題を考える～　36
総合社会福祉研究所第31回総会を開催しました！　38
住まいの貧困を考える～Ⅰ　「携帯電話が持てない」を考える～
藤原　望　42

●連載●

世界と交流する平和の船に乗ってみた！　根津眞澄＋オット　48
第２回　メキシコ・マンサニージョ「小さな天使たちの家」
ＷＯＲＫ ＷＯＲＫ――わくワク――
働いて元気になって笑顔になろう！　レインツリー　52
婦人保護運動のこれまでとこれから（８）　折戸　祥代　54
女性自立支援施設の役割～大阪の婦人保護施設から～
ケア労働処遇改善キャンペーン！⑯　篠田　淳治　58
介護、障害、保育の複雑に絡まり合う各種の処遇改善加算
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（32）
もう我慢できない！　傲慢な岸田政権は退陣へ　60
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（32）
私たちは受け継ぐ世代　飯田　由美　62
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（52）　水野阿修羅　64
相談室の窓から
それぞれのあらたな一歩に向けて　青木　道忠　66
育つ風景
ほんとうにいけないのは　清水　玲子　68
映画案内　『スポットライト　世紀のスクープ』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて　生田　武志　72
腰痛は突然やってきた――高額療養費制度
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
18年ぶりのアレなのじゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　46／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　点字版『福祉のひろば』の発刊まで

●表紙の絵●
神門やす子

ひろば トーク

すべての人が子育てを楽しめる社会へ

ボランティア団体シェアリンク茨木代表　**辻　由起子**

自身の経験を生かして、子ども・家庭支援や虐待を防ぐために全国を駆け回って活動する辻由起子さん。活動をはじめたきっかけや、一〇年以上つづけてきた思いについて辻さんにうかがいました。

（聞き手　黄）

私は、支援を求める親子への無料相談や家庭訪問、必要な生活物資を届けるなどのボランティア活動を一〇年以上つづけています。活動をはじめたきっかけは、かつてわが娘を虐待してしまった苦しい経験があったからです。高校を卒業してすぐ結婚し一九歳で長女を出産しましたが、元夫は働かずに暴力をふるう人だったので、「この子、どうやって育てるの？」と不安しかありませんでした。周りに助けを求めても、〝母親でしょ〟〝自分で選んだ道でしょ〟と言われ、孤立感と絶望感に満ちた苦しい日々でした。子育てとアルバイトをかけもちしながら、時間を捻出して通信大学で幼児教育を学びました。「母親の育児不安について」が卒論のテーマで、卒業とともに、二三歳で離婚し、大手流通会社で正社員として働くことになりました。

しかし、仕事にもだんだん限界がきて、自分は何のために働いているのかがわからなくなってしまいました。「仕事は生活のため」とよく言いますが、その生活を成り立たせるためにまったく楽しくないことをつづけ、ガマンしたり、競争したり、奪い合ったり、そんなことが良しとされる世の中って何なんだろうと思うようになりました。これは、個人の問題というより社会の問題だと確信したので、社会はどのように成り立っているのかを知らなければと思い、三〇歳で仕事を辞めて佛教大学の通信教育で社会福祉を学びはじめました。その後、社会福祉士の資格をとり、同じ境遇の親子の相談や支援

つじ　ゆきこ

1973年、大阪府茨木市生まれ。18歳で結婚、19歳で娘を出産、23歳でシングルマザーに。仕事、育児、家事をこなしながら、通信教育で大学を２回卒業。娘は中学校で不登校の経験を持つ。リスクだらけの子育て経験と、小・中学校の相談員の経験から、全ての人が子育てを楽しめる社会を目指して現在活動中。主な活動は相談業務、イベント開催、政策提言、研修講師、マスコミ発信、行政のスーパーバイザーなど。内閣官房こども政策参与。

をするようになりました。

二〇一〇年七月、大阪市西成区のマンションで起きた幼児二人の餓死事件は、日本社会に大きな衝撃を与えました。私の活動の原点はその事件にあります。家を空けていた母親に対して、世間から「鬼畜」とのはげしい批判がありましたが、この母子が置かれていた孤立状況自体に目を向けなければ、結局当事者のバッシングに終始し、また同じような事件がくり返されてしまいます。同年九月、匿名で登録するミクシィというソーシャル・ネットワーキングサービスを通じて仲間を募り、今の活動につながる団体を立ち上げて、子育てや虐待問題などについての勉強会や無料相談をはじめました。相談を通じて、いろんな家庭問題や社会の課題が見えてきます。負担に思わずに楽しく参加できるイベントを通してつながっていけたらと思い、映画の上映会、親子防災部、フードパントリーなどさまざまなイベントやプロジェクトを立ち上げました。そこからどんどん活動がひろがり、いまは公営住宅を活用した若年者や困窮学生向けのシェアハウスや、食育推進事業、学生ボランティア企画、子ども店長など、多数の事業にとりくんでいます。

子ども・子育て・若者支援を通して、だれもが安心して暮らせる地域社会をつくりたいと思っています。組織とか法律とかではなく、人と人とのあたりまえの助け合い、普通に手を差し伸べることのできる社会。そこで大切なのは、人と人とのつながりです。「制度にないからできない」ではなくて、一人ひとりのサポートを通してぬくもりの連鎖を社会全体につなげていきたいです。

特集

戦争ではなく社会保障で本当の意味での「経済成長」を

ちまたでは、あたかも経済成長とはＧＤＰ（国内総生産）が伸びることであり、ＧＤＰが伸びつづけていくことが、国家の存続には必須であるように語られます。そして、そのためには大企業がさらに潤う必要があり、ではなにで儲けようかとなったときに、やっぱり軍拡でしょうと、軍事・産業・学問、そしてメディアが馴れ合い、複合化して、それぞれの金儲けのために戦争を利用ようとしているのが、いまの日本の状況です。

今夏の第二八回社会福祉研究交流集会では、「防衛費倍増では平和といのちは守れない」をテーマに、記念講演では浜矩子さん（同志社大学）と望月衣塑子さん（ジャーナリスト）のお話をうかがいました。

そもそも経済活動とはなにか、経済政策の目的はどこにあるのか、そして、本当の意味で「経済が成長する」とはどういうことなのか、浜さんのお話をもとにみんなで考えました。経済活動・経済政策の目的は「弱者救済」にあるという浜さんのお話から参加者みんなで確認できたことは、私たちが担っている福祉の仕事こそ、本当の意味での「経済成長」を担っているということです。

昨年の研究交流集会のテーマは「ケアを社会の柱に！　平和を社会の基礎に！」でした。すべての人が

生きていくうえで欠かせないケアが、いまだに軽視されている社会のあり方に対し、ケアを社会の柱に据え、これからの社会を描いていくための方策を、みんなで考え合いました。その学びの上に、今年は、経済学の視点からも、社会福祉や社会保障は経済成長の足枷（あしかせ）なんかではなく、経済活動の柱であり、社会の柱であるということを、共通認識とすることができたのではないでしょうか。

軍拡・戦争はビジネスです。金儲けになります。しかしそれで大きな利を得るのは、一部の政治家と大企業の幹部、富裕層です。戦争でまっさきに犠牲になる高齢者や子ども、弱い立場にいる人たち、大多数の国民にとっては、なんのメリットもありません。そして、一部の人の金儲けのために、国民や将来子どもたちが負担する税金や国債で、その財源を確保しようとしているのです。

ふつうに考えるとありえない話ですが、それをあたかも正しい方向であるかのように国民に刷り込み、本当に議論すべき論点をずらす役割を果たしているのが、いまの日本の一部メディアのあり方です。望月さんは、報道の現場で、「権力監視」という本来のメディアの役割を果たすことがどんどんむずかしくなっている現状を話してくださいました。あらためて、私たちが目を向けるべきところはどこなのか、「なんとなく」ではなく、正しい情報をしっかりと見極める「情報リテラシー」を養っていく必要があります。

一人ひとりのいのちと暮らし、人権を守る福祉労働者の福祉実践こそ、本来の経済活動を守り、社会の柱となる活動なんだということ。そのことを、まずは私たちの共通認識とし、そこからこの価値観をいかに社会に広げていくか、これからもみんなで考え、実践していきたいと思います。（編集主任　申　佳弥）